

完成した箱庭はクライアントの心の一部

●何を作ってもいい、と言われても……
目の前に木の枠があり、薄く砂が敷かれている。「何を作っても、いいですよ」草柳氏からこう言われたが、さてこう言われるとむしろ戸惑い、無制限の自由がむしろ重荷になるものだ。しかしまあ、深く考えずにと気楽にいくつかあ



る棚からオモチャやミニチュアの類を取り出した。建物、仏像、十字架、植物、縫いぐるみ、鉱物、爬虫類、トカゲ、鳥、恐竜、ウルトラマンから宇宙人と何から何まで揃っているなかから、日本の城を取り出して、何となく箱の中央から少し横あたりに置いた。

それからあとともう、五重の塔から石碑から、あれでもないこれでもない物色して勝手に配置した。その間、草柳氏は我関せず、と言った様子で一切口をださない。

「そのうち、『これで完成』といった実感が湧くときがありますから」と言われたが、しかしいつまで立ってもそんな気が起きない。

正直、自分が何を作っているのかわからない。自分の心象風景のようでもあり、ただ雑然とモノを並べただけに過ぎないようでもある。

途中まで作って、何だが全部気に入らなくなり、最初から作り直した。中央にあった城なども撤去して、今度はよほどモノの少ない世界になった。

どことなくストーリーも湧いてでてきた。2つの世界があり、中央の橋をわたって往来する人々……

隅に洋風の建物を置いて「完成」の感が湧いた。

「先生、できましたー！」

●ヴォイス・ダイアローグ

草柳氏はこの作品を見て、いろいろ質問をする。「この人物は何ですか?」「この馬はどうしてこっちを向いて入るのですか?」「この建物は何を意

味しているのですか?」

そう聞かれても、自分自身わからない。自分でも答えを模索しつつ、舌足らずに説明する。

次に「ヴォイス・ダイアローグ」と呼ばれるワークに入った。「このなかから最も気になるモノを指定して、それが我々のいるこの部屋のどこに……敢えて言えば……あるかを教えて下さい」

そう言われたので、最後に置いた建物を示した。するとすれば、向かいのドアだ。

「ではドアに行つて、この建物自身になつて下さい」

それから、世にも奇妙なダイアローグ(対話)が始まった。「あなたの名前は」「いつからそこにいるのか」「周囲に何が見えるか」「地面には何があるか」これらの質問に、こちらも想像力を働かせながら答える。何だか、深い深いイメージの沼に沈潜していくような不思議な感覚だった。

「それでは、そちらからこちらへきて、ゆっくりと現実の世界に戻って下さい」

現実に戻ってから、どこか緊張していた部分が融解したようなさわやかな気分を味わった。一種の解放感、というべきか。

「この箱庭はあなたの心の一部なのです」と言われる。「もうひとつの自己」を作り出すのはなかなか難しかったが、しかしその過程で心のかで何かが変わり、セラピストとの対話を通して漠然としたモノが見えてきたことは、確かなようだった。

(T・M)

こんな時に
おすすめ

内面の探求に関心のある方、言語表現の苦手な方。身体の症状や感情的苦悶をかかえている方